

建築のパラダイムシフト

石川孝重

日本女子大学教授

いしかわたかしげ 1951年東京都生まれ／東京理科大学卒業／同大学院修了／構造安全、環境振動／工学博士／共著に「合成梁の設計と施工」「居住学」「居住性能に関する環境振動評価の現状と規準」ほか



子どものころには、21世紀はどんなだろうと、SF的にとらえていたのがせいぜいであったが、それがいよいよ現実になる。なんでも新世紀と結びつける風情はどうかと思うが、建築界も新時代を迎える雰囲気は出来てきた。

1995年の阪神・淡路大震災で、一般社会にあった建築に対する「安全神話」が崩壊した。ずっと前より建築関係者への信頼は決して高いものではなかったが、それでもこれは大きなエポックであったと思う。アメリカからの外圧により改正建築基準法が1998年6月に国会を通過した。これはきっかけにすぎなかったが、性能設計への動きを加速した。さらに、2000年4月には住宅に対して初めての法律である品確法が施行された。10年保証と性能表示が住宅という日常の生活に密着したものを通して世の中に発信された。この法律は本来、市民に向けられたものだが、市民にはまだ届いていないとも言えない。市民への浸透には時間がかかると考えている。まず、住宅メーカーや建設会社が自社とほかとの区別化をはかるため、保証制度や性能表示制度の活用を導入する。これがちまたの広告などで開示され、ある程度の量になると、今度はユーザーの住宅選びのツールになり始め、そう遠くない時期に表示されていない物件についてはユーザーの評価に疑念が生じるなど、影響が出始める。そうすると各社、質の高い表示情報を掲載しないわけにはいなくなる。住宅の表示が当たり前になれば、公共建築のような建築全般に表示制度が波及することは必然である。本来、公共性の高い建築にこそ、公開・公示（掲示）の必要がある。

テクノロジーが工業から情報へと急激にシフトする現代社会において、性能設計とその表示は情報開示であり、時代の要請にかなっている。新法の表示制度で十分であるはずもないが、この制度は設計情報の開示という効果にとどまらず、構造設計などについては、従来の「専門知識を有した専門家に一任」という社会規範を、「インフォームド・コンセントに基づく性能の設定」という新しいパラダイム（思想的枠組み）へと転換させる。インフォームド・コンセントとは、説明を受けたうえでの同意のことであり、現代医療の基本理念である。建築物はオーナー・ユーザーの財産であり、生命をかけてユーザーが自己責任を負うものであるがために医療と同様の考え方が出来る。ユーザーの合意を得るために、設計者は分かりやすい十分な説明をしなければならない。

やはり人類は偉大なのだろう。20世紀の最後になって次の世紀を見越した準備を怠らなかつた。「建築を社会基盤にしっかりと根づかせること」、これに尽きると思う。新世紀は市民、生

活者、消費者、さらに「個」が主役の時代である。別の言い方をすれば、国やほかが責任を引き受けることが難しい時代である。建築界ばかりでないが、ある程度の質が確保され、その区別化が求められるようになり、価値観の多様化が前面に出てくることになるからである。その要求は強く鋭い。市民、生活者、消費者というマスのなくくりでなく、個別化、特殊化、多様なスタイルへの対応が求められよう。市民個々の要求は多様化のなかで、個々の満足が求められる。その結果として、それぞれの立場に応じた「自己責任」が問われることになる。

自己責任を問われるユーザーは、個々の評価を余儀なくされ、情報の開示の要求が発生する。建築を社会に位置づけるためには「情報の開示」と「責任所在の明確化」は避けられない。ユーザーばかりでなく、専門家としての責任も当然負わなければならない。設計、施工、行政、研究者・教育者の責任、あるいは学会の責任や果たすべき役割を明確にする必要がある。

学問のパラダイムシフトから、個が主役のなか、人間をターゲットにした応用学問が注目される。建築はもともと人間を中心に据えた応用工学であり、周辺領域を含めた再構築がなされるであろう。構造、環境、計画という縦割りになりすぎた専門分化には、揺れ戻しがある。工業化時代、情報化時代という二つの時代を超えた第三の波は、人間の根元へと向かう波である。人間の要求を問題の中心とするテーマがそこにある。それは、グローバル、ボーダーレス、人間心理といったキーワードとともに迫りくる。身近な人間の要望から出発し、論理性と感性を合わせ持つ学問体系の再編が必然である。

それを教える大学にも改革は迫る。20世紀終わりの学部学科名称の変更で終わるわけではない。少子化が生む教育対象の意識変化は授業形態にも影響する。活字離れ、映像型の学生に対する動機付け教授法には工夫がいる。興味を引き出す必要がある。これには、体験ビジュアル型の授業が有効である。小生の試行をHP (<http://www.jwu.ac.jp/jyu-ishii/isikawa.html>) に「力と形」として掲載しているので見ていただきたい。なお、社会人教育、再教育、生涯教育が大学の大きな部分になる。夜間授業の設置や解放はもとより、大学と企業との連携（産学協同）を活発に行うことがお互いの活性化につながるようになる。

同じ意味で、学会に目を移せば、工務店とのリンクが鍵になる。大手ゼネコンは自前でできる。性能設計の時代、学会の資産の活用は自前の研究所を持たない工務店にとってメリットが大きい。それぞれが得意技を生かす、学会と工務店とのネットワークをどうつくるか、これが今後の課題である。